

組織目標評価報告書（令和4年度）

部局名：

異分野基礎科学研究所

部局長名：

沈 建仁

目標・取組		目標・取組の達成状況(成果)及び新たに生じた課題等 (部局での検証とそれに対する取組)
<b>①教育領域</b>		
	関連する 年度計画の番号	教育領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<p>博士後期課程「学際基礎科学専攻」の教育体制を引き続き充実させる。また、学生の研究指導ならびに教育に外国人研究者が関与する体制を構築し、「研究力を高める教育」を実践する。国内外から学生を積極的に勧誘し専攻の定員を充足させる。学際的な教育・研究による学生の多様なキャリアパスを形成する教育課程を実現するため、専攻の共通履修科目、科学哲学・科学倫理・プレゼンテーション力を修得させる。インターシップの大学院生の派遣・受け入れによる国際交換プログラムを推進するが、SARS-CoV-2の感染状況によりオンラインでの交流を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本専攻の学生が研究活動に集中できるようにリサーチアシスタントとして雇用する。</li> <li>・学生の海外への派遣、海外からの学生の受け入れを積極的に推進し、教育環境を国際化する。</li> <li>・学際基礎科学専攻の定員充足を図る。</li> <li>・SARS-CoV-2感染症のパンデミック終了後を見据えて、国際交流協定を充実させる。</li> </ul>	7-1-2 9-1-2 7-1-3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・優秀な博士後期課程の大学院学生をリサーチアシスタントとして10名雇用し研究活動に集中できる環境を整えた。</li> <li>・新型コロナウイルス感染が治まらなかったため、学生の海外派遣および海外からの学生の受け入れは実施できなかった。教員の海外派遣および海外からの研究者の招聘は数件だけ実施した。しかし、外国人特任教授による学生の研究指導により、国際的な環境下での教育を補った。また、英語による研究所セミナー(RIISセミナー)を対面で開催し、大学院生を参加させ、英語環境での研究力向上に貢献した。</li> <li>・新型コロナウイルス感染症の拡大により海外からの留学生の確保が難しい状況であったにもかかわらず、9名の入学を確保した。入学したが来日が実現できていない留学生にオンラインでの教育・研究指導を行った。</li> <li>・大学間および部局間協定の締結を3件更新し、1件を新規に結んだ。</li> <li>・オンラインでの国際セミナーを3件開催した。</li> <li>・国際交流の促進が困難な状況が続くが、それを補うため海外の研究者によるオンラインセミナーやオンライン研究指導などを実施する体制の構築を準備した。</li> </ul>
<b>②研究領域</b>		
	関連する 年度計画の番号	研究領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<p>「基礎科学研究の深化発展と異分野融合的研究展開による新しい学問分野の創出と国際的な研究活動の推進」の理念に基づき、物理学と基礎生物学を中心に研究支援を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高インパクトファクター雑誌とQ1ジャーナル論文公表、Top10%論文数、若手教員による論文数および国際共著論文数の増加を図る。</li> <li>・国際構造生物学研究センターの設立を目指し、クライオ電子顕微鏡の導入を図る。</li> <li>・英語による研究所セミナーを継続し、研究の深化と異分野融合を促進する。</li> <li>・SDGsを念頭に置いた新たな研究展開、異分野融合の研究を支援する。</li> <li>・外国人教員およびRECTORプログラムの研究グループを中心に国際的な研究環境を整備する。</li> <li>・海外の研究者の招聘・国際共同研究推進・若手研究者と大学院学生を派遣・招聘する体制(状況によりオンラインによる交流)を推進する。</li> <li>・女性・若手研究者(特別契約職員を含む)の採用・昇進を進める。</li> <li>・大型プロジェクト研究および科研費の申請を促進する。</li> <li>・SARS-CoV-2感染症の世界的大流行終息を見据えて、インターネットを活用した研究交流を積極的に行う。</li> </ul>	8-1-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Nature誌の論文1報を含む、IF(インパクトファクター)10以上の高IF雑誌の論文10報を発表した。</li> <li>・基礎研の研究者による英語のセミナー(RIISセミナー)をほぼ毎月実施し、研究活動の情報交換を活発化した。</li> <li>・国際構造生物学研究センターの設立を準備し、令和5年4月1日から設立されることが決まった。クライオ電子顕微鏡の導入が決定し、それをを用いた構造生物学研究が一層進むための準備を整えた。</li> <li>・外国人教員の研究グループとRECTORプログラムの海外PIIによる研究グループの研究環境の整備を支援した。招聘したハーバード大学のドイル教授との共同研究は順調に進展した。</li> <li>・海外からの研究者の招聘、若手研究者と大学院生の相互派遣は新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行のためほとんど実施できなかった。</li> <li>・准教授1名を教授昇任させた。</li> <li>・特別推進研究1件、基盤研究B 2件が新規採択された。採択された主な研究費は、基盤研究(S)1件、(A)7件、(B)14件、JSTからはCREST継続1件、ヒューマンフロンティアサイエンスプログラム(HSFP)継続1件、Gordon and Betty Moore Foundation継続1件。</li> </ul>
<b>③社会貢献(診療を含む)領域</b>		
	関連する 年度計画の番号	社会貢献(診療を含む)領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<p>学会等の活動に積極的に参加することを推進する。特に、学会の役員、各種の専門雑誌等における編集委員などを増やし、研究者コミュニティにおいて異分野基礎科学研究所の存在感を増加させる。また、国際組織、国、地方組織における各種専門家会議のメンバーとして積極的に活動することを推奨する。さらに、学会の年会、国内および国際会議、セミナー、ワークショップ等を開催することを推し進め、研究者コミュニティにおける学問発展に貢献する。各種企業ならびに地域の中小企業等の技術相談に積極的に応じる。また、海外の大学や研究機関との交流協定を推進し、国際共同研究遂行の体制を強化する。国内外ならびに地域においてSDGsを念頭に置いた社会活動に積極的に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究所として国際会議・セミナーを開催する。</li> <li>・専門雑誌等の編集委員やAdvisory Boardメンバーなどの数を増やす。</li> </ul>	8-1-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインでの国際研究会3件を開催した。4年に1回開催される第18回国際光合成学会で、菅は日本人として初のHill賞を受賞し、沈はPlenary lectureを行い、サテライトミーティングを共催した。また、沈はストックホルムで開催されたノーベルシンポジウムで招待講演を行い、グレゴリー・アミノフ賞の賞状とメダルをスウェーデン国王からいただいた。</li> <li>・6件の国際誌(Scientific Reports, Advanced Electronic Materials, Journal of the Physical Society of Japan, Physica A, International Journal of Molecular Science, Photosynthesis Research)の編集委員を務めている。</li> </ul>
<b>④管理運営領域</b>		
	関連する 年度計画の番号	管理運営領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<p>異分野基礎科学研究所の設置理念の実現に向けて協力する体制づくりを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コア長会議(所長・副所長・コア長)による調整会議と、英語での教授会による運営体制を継続し、研究所の各研究グループ間の情報共有を確保する体制を維持・発展させる。</li> <li>・分野の異なる各研究グループが新しい建物に入り、体制が整ったので、異分野間の交流を促進し、研究に打ち込める環境・体制の整備を進める。</li> <li>・個人の発想を尊重しながら研究課題を深化し、異分野融合の研究を進める研究所の理念を実現していく体制を構築する。</li> <li>・研究所の若手・女性・外国人教員が研究活動に集中できる体制を作る。</li> <li>・研究活動を活性化するため、研究所の研究活動の状況を把握し、投資すべき対象を選択し、傾斜配分方式で限られた資源を配分する。</li> <li>・成果を出すのに時間がかかるが重要な研究および萌芽的研究の支援にも目を配る。</li> <li>・コンプライアンス教育を推進し、法令遵守のもとで研究活動を行う。</li> </ul>	8-1-1 その他-1 その他-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コア長会議による調整会議を適宜行った。研究所教授会は合計11回、基本的に対面で行い、研究所の重要事項を議論・決定した。外国人特任教授が参加するため、会議は英語で行い、外国人特任教授の研究グループ間とも情報共有は十分に行えた。</li> <li>・女性や外国人教員に必要な財政的な支援を行い、研究活動や異分野融合研究を推進した。コア長会議や研究所教授会およびRIISセミナーに開催時などを含めて日常的に研究所の提案・要望・問題点を共有した。</li> <li>・コンプライアンス教育などは講習会に参加した。特にコンプライアンスに関する問題が生じることはなかったが、いつでもオープンな議論ができるよう研究所の体制をコア長会議および研究所教授会を介して維持してきた。</li> </ul>

注1) 本様式全体が1ページに収まるよう作成してください。

注2) 自己評価による達成度(5~1)は非公表項目とし、組織目標評価結果を公表する際に消去します。